書　評

書評：植野弘子・上水流久彦編『帝国日本における越境・断絶・残像——人の移動』，『帝国日本における越境・断絶・残像——モノの移動』風響社，2020 年 2 月刊

井　出　弘　毅*

Book Review: Ueno Hiroko and Kamizuru Hisahiko eds.(2020) *Cross-border, Discontinuity and Afterimage in Imperial Japan - The Flow of People* / *Cross-border, Discontinuity and Afterimage in Imperial Japan - The Flow of Goods,* Fukyosha

Ide Kohki

本書は，『帝国日本における越境・断絶・残像——人の移動』（以下『人の移動』）と，『帝国日本における越境・断絶・残像——モノの移動』（以下『モノの移動』）の 2 冊組となっている。2 冊とも，「まえがき」と「あとがき」，「序　帝国日本における人の交錯」の前半部分は同じものとなっている。そして「序　帝国日本における人の交錯」の後半部分が，『人の移動』では「4　帝国日本における人の移動」であり，『モノの移動』では「4 『帝国日本』のモノと現在」である。この部分において，それぞれ人とモノに特化した内容となっている。『人の移動』では 5 つの論文と 4 つのコラムが，『モノの移動』では 6 つの論文と 5 つのコラムが掲載されている。

本書の成果の多くは，科研プロジェクト「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究—台湾・朝鮮・沖縄の他者増とその現在」（研究代表者　植野弘子，JP25244044）に負うものである。このプロジェクトでは，「日本対植民地ではなく，台湾と朝鮮半島というような旧植民地と旧植民地の関係を視野にいれ，かつモノが結ぶ帝国日本という視点で研究を行った」（『人の移動』：2）とあり，「日本を中心として東アジアを見る見方から脱却できていない自分の認識の狭さを痛感することとなった」（『人の移動』：2）。すなわち，これより以前に編者・著者らによって行われてきた台湾や旧南洋群島における帝国日本の問題に向き合った研究成果を受けて，この科研プロジェクトでは，帝国日本の旧植民地（台湾・朝鮮半島・

* 東洋大学アジア文化研究所客員研究員；Visiting scholar, Asian Cultures Research Institute, Toyo University,5-28-20,Hakusan,Bunkyo,Tokyo,112-8606 / kowkide@gmail.com

沖縄[1]）間を移動する人とモノという視点へと大きく展開したものである。

本書の目的は，「移動によって生み出された，今にいたる他者に対する認識を，人が想像しうる生活に密着した視点から」（『人の移動』：18）問い直そうとすることである。そして，「生活者の視線に映る他者の姿を描き，他者とのつながりを考えてゆく」（『人の移動』：18）。そこで，「これまでの研究で，触れることの少なかった，あるいは等閑視されていた課題」（『人の移動』：44）として，次の点をあげている。

まず，「日常生活に根付いた人間関係やモノに視点をおいた考察がなされていること」（『人の移動』：44）である。フィールドワーク・インタビュー調査・文献調査においても，「当事者の目線から移動と他者像を探ろうとする著者たちの立ち位置」（『人の移動』：44）が現れている。他方研究活動に関する論文からは，「他者を見る視線に自覚的になることの必要性」（『人の移動』：44）が喚起され，「人類学的研究は，他者の社会に入り，そこで自らの立ち位置，他者との間合いを確認し，他者の目で自らをみることが求められる」（『人の移動』：44）という。また，「これまであまり語られていなかった地域の間」における「移動」を問うている（『人の移動』：44）。さらには，「帝国日本の移動に注目しながらも，その範囲内に止まらない移動を視野にいれなければ，帝国の移動自体も考えられないこと」（『人の移動』：44）も示している。

以下，簡単すぎるということは重々承知の上で，各論文について一覧にしてみた。2 冊の全体をざっくりと見る上で，大まかなガイドとなるであろう。

『人の移動』

著者	対象	移動	特徴的な事項
崔吉城	秋葉隆	朝鮮・韓国内	研究を弟子たちが継承
中村八重	朝鮮通信使 再現行列	朝鮮・韓国から日本 （釜山・対馬・下関）	帝国日本の時代の移動の 歴史との断絶
冨田哲	韓国華僑	韓国から台湾	民族・国民概念とアイデンティティの時代背景との関わり
松田良孝	台湾系住民	台湾から沖縄（宮古・八重山）	米の商いの担い手
全京秀	鹿野忠雄	台湾，フィリピン，東南アジア 分野移動と思想移動	「脱他者化」の認識 忘れられた人類学者

1）本書では沖縄を「准植民地」としている（『人の移動』：18）。

『モノの移動』

著者	対象	移動	特徴的な事項
角南聡一郎	日式表札	日本から台湾，朝鮮	現地のモノとの融合と来歴の忘却
上水流久彦	近代建築物	日本から琉球・沖縄	「忘却させられた近代」
林玉茹	税関制度	日本から台湾内	日本による近代化の浸透
谷ヶ城秀吉	日本企業の事業	日本から台湾内	空間的に越境できなかったモノ
林史樹	粉食中華	中国から朝鮮半島・日本へ	「食の段階的定着」と食の「上書き」
八尾祥平	パイン産業	ハワイから台湾そして沖縄へ	旧日本帝国の枠を超えた人とモノの移動

対象となる人やモノの種類もバラエティに富んでおり，地域的にも帝国日本の領域のみならず，帝国外にまで及んでいる。まさに共同研究の醍醐味の詰まった 2 冊であるといえよう。研究者を中心に見たものや，ある程度似た点に着目したものも見られる。

また本書では各論文の間に短いコラムを挟んでいる。これも論文同様に一覧にしてみた。

『人の移動』

著者	対象	移動	特徴的な事項
上水流久彦	親日イメージ	台湾	認識の交錯とズレ
中村八重	あんぱん	韓国（群山）	収奪と近代
林史樹	「洋食」	朝鮮・韓国	朝鮮の「洋」と日本の「唐」
八尾祥平	パイナップルの焼菓子	ハワイ・台湾・広島	帝国の盛衰とその後のアジアの姿

『モノの移動』

著者	対象	移動	特徴的な事項
冨田哲	朝鮮総督府警察官	朝鮮から壱岐	「現地」との接触の場
三尾裕子	「日本神」廟	台湾	「日本」を取り込む

西村一之	漁民の言葉	台湾・与那国	知識と言葉が日本から台湾そして来台する漁業労働者へ
鈴木文子	在朝日本人	朝鮮	単なる風景としての朝鮮
角南聡一郎	職人の技と道具	朝鮮・台湾	意識されない「日本」由来

『人の移動』に掲載されている上の 4 つについては，中村を除く 3 人が『モノの移動』の論文執筆者である。逆に『モノの移動』掲載の 5 つのうち，冨田が『人の移動』の論文執筆者である。『人の移動』では中村が,『モノの移動』では角南が論文とコラムの両方を執筆している。『モノの移動』の三尾・西村・鈴木は論文執筆者ではないが，これまでの編者・著者たちの調査研究などにおいて密接な関係を持つ方々である。一見したところ中心となっているのは台湾研究者であるが，著者の中には，韓国・沖縄・日本研究者，またそれら地域をまたがる研究活動を行う方々もいる。

ここからは『人の移動』の論文から見ていくこととしよう。各論文のサマリーは, 2 冊とも「序帝国日本における人の交錯」の「5　本書の構成」において簡潔にまとめられているため，ここではできるだけ重複しないよう努めて検討する。

まず最初に順番を多少変更して，研究者に関する論文を 2 つとりあげる。崔吉城「植民と研究の断絶と継承――秋葉隆を中心に」では，秋葉隆が「他者に資料収集を依頼する，あるいは補助を頼むことで，結果的に現地の研究者が育っていったということ」(『人の移動』：84）を指摘している。そして「その弟子たちにとっては，教師を植民者としてより，研究者や教育者として評価したということ」(『人の移動』：84）に言及し，「『親日と反日』という枠を超えて教育，研究の世界への理解であったとしか思えない。文化人類学と植民地状況を今の視点や価値観で批判することはできない。当時の研究状況を理解しなければならない」(『人の移動』：86）という。これを受けて 1 つ思い出すことがある。評者の恩師の故鈴木二郎先生が，戦時中の民族研究所での体験をよく話されていた。当時先生は，日本軍がイギリスの植民地から奪ってきた英語文献を朝から晩まで読んでいて，「不謹慎ではあるが」本当に充実した時間だったそうだ。終戦時中国にいた先生は文献を守るため，油紙に包んで土中に埋め，安全になってから掘り返して持ち帰ったとのことである。民族研究所の関係者が戦後，日本の人類学の発展に寄与したことは事実である。人類学の戦争協力という側面だけを批判するだけでは片手落ちであろう。当時の時代情勢の中で行われた研究活動であるという理解が重要であると思われる。またアメリカの SF テレビシリーズのスタートレックでは，戦争中に宗主国の医師が植民地人に対して人体実験を行って得た成果を，戦後患者に使用できるかどうか，という究極の選択が描かれている [2)]。人の命に関わる医学と人類学は違うが，ド

ラマとはいえ大変考えさせられるものであろう。

『人の移動』はこの崔吉城論文から始まるが，全京秀「大東亜戦争に巻き込まれた人類学者，鹿野忠雄――鹿野学の漂流と移動」がトリを務める。これも戦時下の人類学者という戦後顧みられることの少なかった鹿野忠雄についての論文である。埋もれていた様々な資料から鹿野の調査研究活動やその思想について復元した。鹿野は現地の人と同じ視点に立っており，「鹿野のこのような立場や視点を脱他者化（de-otherization）と命名」（『人の移動』：243）するとし，「研究対象であった住民を優先して考えることが，少なくとも他者化の枠から抜け出そうと試みることだったと考えられる」（『人の移動』：244）と説明している。最後に「遮断された死者の記憶は，生き残った者によって再生されるのを待っている」（『人の移動』：252）。そして「記憶は遮断されない。真実を知ろうとする人が現れるのを待つ，死者の記憶が存在するだけである」（『人の移動』：252）と印象的な言葉で締めくくられている。全は，長期にわたるフィールドワークを行った鹿野はもっと注目されるべきであるとしている。同じフィールドワークを行う者として，襟を正される論文である。

中村八重「国際交流事業における在日コリアンの参与――対馬と下関の朝鮮通信使再現行列を中心に」と冨田哲「韓国華僑と台湾――台湾の大学への『帰国』進学者を対象に」，松田良孝「沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在――宮古地方と八重山地方を比較して」は，それぞれ地域は違えど，移動する／した人々を対象としている。中村は在日コリアンの頭越しに行われる国際交流の問題点を指摘し，「旧植民地の被植民者の人々への日本社会のまなざしを『脱帝国化』した国際交流が望まれる」（『人の移動』：123）と述べている。評者も釜山・下関・対馬を調査しているが，中村の指摘に同感である。冨田は，「進学によって韓国から台湾への移動を経験した韓国華僑と台湾，ひいては東アジア各地域などとのかかわりのありようを，時代背景の変化と重ね合わせながらさぐること」（『人の移動』：136）を目的とし，バウンダリーの問題について詳細に追っている。インタビュー内容の提示の仕方について，代表的なエピソードを際立たせることは大変効果的であると思われる。現在台湾は日本との国交がないという点からは，日本における朝鮮学校との比較という視点も喚起させられた。松田は，「植民地期の台湾から宮古へ移動してきた人々について明らかにすると同時に，八重山との比較を通じて，先島地方が内包する台湾人に対する記憶の差異を描き出すこと」（『人の移動』：180）を目的とし，宮古の台湾系の人々について詳述している。特に米というモノの商いから，宮古の台湾系の人々が大きな影響を与えたことが明らかにされた。

続いて姉妹編である『モノの移動』である。こちらでは，文字通りモノに着目した論文が

2）Star Trek - U.S.S. Kyushu［スタートレック総合サイト］「ヴォイジャー簡易エピソードガイド　第 102 話『寄生生命体の恐怖』」（http://www.usskyushu.com/ds9/voy102.html）。スタートレックには，この他にも文化相対主義やマイノリティ問題を扱った作品も多い。

掲載されている。まず最初の角南聡一郎「日式表札の成立と越境――旧日本植民地における諸相とその後」では，「植民地時代に表札が越境をして広がっていった過程を復原」（『モノの移動』：72）し，「戦後の継続について検討を試み，その背景にあるものを考える」（『モノの移動』：72）とする。この「日式表札」は，戦後も旧植民地において，警察制度による治安維持と郵便制度との関係において継続し，「旧日本植民地に残る日式表札は，日本により持ち込まれた制度がそれぞれの文化と融合，混合し在地化した産物である」（『モノの移動』：98）と結論付けている。次に，上水流久彦「近代建築物にみる沖縄の近代化認識に関する一試論――琉球・沖縄史の副読本にみる歴史認識を踏まえて」では，「様々な近代システムの導入に加え，皇民化・独自文化の消失・いびつな経済構造などの否定的側面も含んだ様相を指し示すもの」（『モノの移動』：110）として，「近代化」という概念を設定した。そして，発展という近代化ではなく，植民地支配が貼りついた「近代化」を語る困難さについて述べている。

また主に制度面に注目したのが，林玉茹「日本統治期台湾における税関制度の変遷」である。この中で「日本統治時代の台湾の税関を対象とし，幕末から明治維新以降，日本式の税関の形式がどのように台湾に移植された変革されたのか，その過程と歴史的な意義を検討」（『モノの移動』：149）した。等閑視されやすい制度を，数少ない資料から裏付けている。

続いて谷ヶ城秀吉「植民地台湾における綿布消費の嗜好と商社の活動」では，「植民地台湾における三井物産の取引活動を主として綿布のそれに焦点を当てて復元し，観察した」（『モノの移動』: 201）。そして，「事業活動を困難に陥れた制御不可能の緩慢さを『生活程度〔の〕低』さというステレオタイプに置換して植民地主義的言説の再生産に加担したのではあるまいか」（『モノの移動』：203）との指摘がなされている。

最後は，食に注目した2論文である。林史樹「戦前・戦後期の日韓にみられた粉食中華の普及過程――『食の段階的定着』の差に着目して」では，「粉食中華が日本や朝鮮に広がる際の受容・変容過程を比較検討」（『モノの移動』：44）し，「担い手が抱えている『背景』の違いが食の伝播にどのような影響を与えたのか」（『モノの移動』：217-218）について考察している。そして，「食の段階的定着という考えを用い，本稿では地域の特性や社会情勢の変化に応じて，さまざまな段階を経て導入され，普及していった」（『モノの移動』：241）と指摘している。さらに，「食が段階的に定着し，常時『上書き』がなされること」（『モノの移動』：241）についても言及している。最後に，八尾祥平「パイン産業にみる旧日本帝国圏を越える移動――ハワイ・台湾・沖縄を中心に」では，「地域を中心とした枠組みからは周縁化されて描かれやすい，こうした移動を担った人々の視点から歴史を描き直したい」（『モノの移動』：260-261）とする。そして，「パイン産業におけるモノと人の移動の特徴は戦前の列強の中心間ではなく，周縁間で生じていた」（『モノの移動』：286）ことを明らかにした。また取りこぼされがちなものとして，「帝国間の地域秩序の変動に翻弄されながらも，自らの生活

基盤を確立しようともがき，国境を越えて移動した労働者としての民衆の姿」（『モノの移動』：288）に注目する。そこで，「複数の勢力圏がひしめくなかで移動しながら生きてきた人々の視点から歴史を描き直すことの重要性」（『モノの移動』：289）を指摘し，「国境を超える経済開発を労働という観点から批判的に検証すること」（『モノの移動』：289）を今後の課題であるとした。

最後に全体を読んだ上で，いくつか考えたことを述べておきたい。まず本書の著者たちの多くは，評者とはフィールドや分野が違うということで，様々な事柄について喚起させられ，大変良い刺激となった。それと同時に，特に植野弘子・上水流久彦「序　帝国日本における人の交錯」において展開された人類学的研究と植民地をめぐる議論については，お恥ずかしながらやや消化不良になるくらい濃い内容であった。

また韓国研究者として感じたことは，現地の人々から台湾研究者が受けるという「親日」的な態度やまなざしへの居心地の悪さということである。よく，「同じ」植民地なのになぜ韓国と台湾は日本に対する態度が 180 度も違うのか，という問いがある。これは本書の論文とコラムを読んでから，じっくりと考えていただきたいと思う。帝国日本と植民地を見ていく時，安易なノスタルジーやステレオタイプ的な歴史認識，「分かりやすい」説明による安直な理解に陥りがちであることに対して，自覚的であるべきであろう。評者が学生時代，かなり左寄りの思想に傾いていた頃，右翼的な言動の多かった父親のことを「大日本帝国親父」と呼んでいた。父親は普段から，日韓併合でインフラ整備など良くしてやったのに，韓国人は日本に文句を言う，など右翼的な言動を繰り返していた。ある時評者と言い争いになった。評者は父親を批判し，理路整然と言い負かした。すると父親は，「お前は何も分かっとらん」と言ってその場から去った。それを見ていた母親は評者に対し，「あんたはちょっと勉強して自分が頭が良くなったと思って，父親を馬鹿にする人間になったんか」と激しく怒った。その時から評者は，父親と言い争うことはしなくなり，「平和共存」するようになった。それは，自らを恥じたことが一番大きな理由であったが，頑固な父親を変えることは到底できないだろうという諦めもあった。その後さらに学ぶことで，帝国日本を生きた父親にとって右翼的な言辞は至極当たり前のことであり，「何も分かっとらん」と言った父親が知っていたことや思いというものの中身について，少しは「理解」することができるようになった。昔の写真や映像は基本モノクロであるが，当時の人は当然のことながらカラーで見ていたはずである。画像技術の進化によりモノクロをカラー化した写真などを見ると，現在と全く異なると勝手に思い込んでいた過去が鮮やかに立ち現れてくる。ここ最近戦争中の日常生活を描く作品がいくつか出てきているが，それらは当時の何気ない当たり前を表現している。ひどい過去を自らとは全く関係ない「異常な事態」とするだけでは，そこからは何も学ぶことができなくなってしまう。あくまでも我々が「今ここで」見ている景色と同じような過去において，帝国日

本そして植民地があったのだということを忘れてはならないし，学び続けることがとても重要だと思う。その意味で本書は，学部のゼミや授業などにおいて利用することもお勧めである。本書で示された一定の研究成果を受けて，こうした試みが今後どう展開していくのか，大変興味深いと同時に楽しみである。